

スーザン・ソントグ『ただ一人の』(1995)

好きな作家は？ 何年も前にインタビューされたことがある。—1人だけ？—ええ。—それなら簡単。シェイクスピア、もちろん。—え、シェイクスピアとお答えになるとは思いもしませんでした！—それはまた。どうしてそう思っていたんですか？—それは、まあ、あなたがシェイクスピアについて書いていないから。

え。

そういわれるということは、私という人間は、私が書いたとおりであるはずということなのだろうか？ それ以上でもなく？ それ以下でもなく？ けれど、物を書く人であれば誰でもそういうものではないと知っている。

私が書くのは、私が書けること。つまり、授かったものがあり、書くに値することがらであるということ、あえて私が書く価値があるということ。私には、自分のフィクションやエッセイには取り上げていない、でも情熱を持ち重要と感じている事柄がたくさんある。取り上げていない理由は、自分の頭にあることに取り立ててオリジナリティがなさそうだからであったり（たとえばシェイクスピアについて書かずにいられないようなものを私が持っているとはとても思えない）、そのことについて書くための必要な精神的自由を持ちえていないという自覚がまだあったりするからである。私の本というのは、私自身ではない—[少なくとも]私のすべて、ではない。そしてある意味、私は自分の作品未満といえる。過半数の作品は、私がそうであるよりも知的で、才能に溢れている。というかとにかく、別物である。物を書く「私」は一ある種の文学的な目標や文学に対する忠誠心に沿った形で、執筆活動に特化してアップグレードした一生きている「私」の、ある変化形である。私が私の本を作るということが、真実だと感じられるとすれば、それはごくささやかな意味でのみである。私が実際感じていることは、私の本は、私を通じて、文学によって、作られているということである。いいかえれば、私はそれらの（文学の）しもべなのである。

その、自らの本を作る媒体となっている[執筆者というだけでない]私には、他の欲望も、他の義務もある。たとえば、[執筆者というだけでない]私としては、自分は正しい行動[を起こすことの力や意味]を信じている。けれども、作家としては、ずっと複雑である。文学というのは、[誰にも了解済の]正しいことをする、というものではない—それは志の高いレベルでの表現（言語）であり智慧（明示的な包摂性であり、共感であり、倫理的誠実さ）である。そして、私の本というのは、私が何者であるかを発見したり表現したりする道具ではない。私はかつて一度も癒しとしてのあるいは自己表現としての執筆というイデオロギーを好んだことはない。

それらの本がなぜ私ではないのかという、より深い理由は存在する。私の人生は常に、なりつつある、というものだったし、いまだにそうである。一方で、本は完成している。私は書物によって、行動し、存在し、感じ、何か他のものに対して強いあこがれを抱き、そうして解き放たれてきた—そうやって私はとても熱心に学んでいる。ずっと動きつづけている。時には本から、そういう書物が作り

出したたわごとから、逃げ出すような気持ちになる。時にはその勢いや衝動がずっと気持ちのいいものに思える。再度始めることを楽しむこともある。始めた頃の心のあり方が一番いい。

その初心こそ、駆け出しの頃からずっと離れた位置にいる今、私が心から受け入れ自分に許しているものである。30年前最初の本が出版された頃、私は、こういった二人の人間がこの場にいるという虚構の、ずっと単純な姿を心地よく感じていた：私と、私と同じ名前の作家がいるということに。数多くの書物に対する賞賛—いや、崇拜—が私をこの職業に導いたのだ、膝をついて。だから、自然に、自分の才能が足りないのではないか、十分な価値がないのではないかと私は恐れることになった。では、どうやって、文学の広い海へ自分のちっぽけな船を出航させる勇気を奮い起こしたのだったろうか？ 表出されそして強いられた、二つであることを通して。自分が持ちえたものと、自分の作品に充足させたいと私が願った水準との差を、自ら意識することを通じて。

事実、私は「私の」仕事をしたといったことはない。いうとしたら「その」仕事であった。その延長上に、あえて作家にならんとした、その人間もいたのである。そして私は、文学たるものが充足すべき基準があると信じる人間である私の方は、彼女が[作家になる道を]進むためであれば喜んで犠牲を払ってきた一方で何を彼女が書いたかについてはそれほどは考えていなかった。

作家として続けても、こういった満たされなさが緩和されることはなかった。[少なくとも]それほど長くは。単に賭ける額が上がっていただけだった。（今にして思えば、満たされなかったというのは正しかった。）私の「ソントグと私」のゲームでは、知らぬ存ぜぬというのが本当のところだった。自分の本棚に段々増えていくスーザン・ソントグによる著作には圧迫される感覚と同時にためらいまじりの誇らしい気持ちがあって、私自身（探求者としての私）と彼女（ただそこにいる彼女）を区別するのは苦痛であった。彼女について書くことに、私は何にせよおじけづいた。それが賞賛であれ酷評であれ。[つまり]私が長年持っていた自己欺瞞の一形態[がそこにあった]：私は彼女のことを誰よりもよく知っていて、彼女の作品に対する自分以上に厳しい判断を下す存在はいない[と信じてきたのだ]。

作家なら誰しも—ある時点以降は、その人の労力が作品という形に実ったとき以降—彼自身または彼女自身がフランケンシュタイン博士と彼の怪物の両方であるという経験をする。秘密の共有者にかくまってもらおうというのは、おそらく駆け出しの作家の空想というわけではなく、そうした思い込みが、作家を惹きつけ縛るのである。そうしてその作家は物を書き続ける。そうするうちに、あるペルソナが存在するようになる：持続的に存在し、無視しようと試み、初期作品から疎隔を少しずつ侵食し、その間にもっと多くの作品ができ、より酷く縛るもの。そのペルソナは、内面（執筆のもつ恍惚と困難）と外面（その人物の評判と名声を作る誤解とステレオタイプの集積）の間にある、やる気をそがれるようなずれを、遊び心たっぴりに肯定してみせる。私はそんなイメージの人間じゃないですから（他の人たちの頭の中にあるような）、とそのペルソナは言い放ってしまう。さらに痛烈に：あなた方が成功と呼ぶような事柄について、私に罰を与えるな、とも。私はこんな重い荷を負わされたのだ。この強迫観念的に仕事に取りつかれた野心あふれる作家は、私と同じ名前を持っているのであ

る。私は、ただ私だ、共にいて、諸々のことを処理し、例の件をなんとかする。そうして彼女がいくらでも仕事をやり終えることができるように。

そして、より具体的には、この、自身の二重性が、文学作品を作り出すために必要な自己放棄に対して晴れやかな輝きを、もたらすことになる。ここでいう自己放棄というのは、ほぼ間違いなく「現実の」生活においては利己的というスティグマを与えられてしまう。物を書くということは、カフカが言ったように、どれだけ一人でいても一人であることが足りないことなのである。けれども物書きの人が愛する人たちは、その人が一人でいることの必要性を理解してくれない傾向がある。物を書く人は、仕事を完成させるために、他の人たちを寄せつけないようにせねばならない。そしてそういう[周囲の]人たちをなだめるには—この問題はその物書きが女性である場合にはさらに厳しいことになるのだが。怒らないで、嫉妬しないで。どうしようもない。分かるでしょ、彼女が物を書いているのです。

W.B. イエーツは、人は人生か作品のどちらかを選ばなければならない、といった。それは違う。いや、その通りだ。たった一度きりの人生の大半を惜しみなく自分の本のために費やした結果の一として、自分は、一人の人間としては、自分の人生をだました、と感じるにいたるのである。昔、何年前に、ホルヘ・ルイス・ボルヘスが書いた彼自身に対するエレジー[（哀歌、挽歌）]に初めて触れたとき、自分が笑いだしそうになったことを覚えている。それは、人生と仕事の折り合いをつけることについて物書きがかかえる、不安や心配やぎこちなさを最も繊細に弁明していた。物書きの悲哀。物書きの謙虚さ。（彼の謙虚さのもつ悪賢さが、私には羨ましかった。）

今そのエレジーを再読しても、私はいまだににやりとさせられる。けれども、ボルヘスが寓話としてあんな風にすてきに描き出した作家の自意識を、どうかして和らげようとは、私はそれほどしない。

私自身からのある種の皮肉な隔たり（初期の隔たりは皮肉でも何でもなかったが）をどうにかしたいと思うのとは全く逆に、私はゆっくりと反対方向へ進化している。そしてようやくあの物書きが、作家が私なのだと感じるようになった：二人目の私でも、よく知ったものでも、影の遊び友だちでも、創造物でもない。（なぜかというとは私はここまできたから—ここまで30年近くかかったけれど—ついに自分が本当に好きな本『火山に恋して』を書くことができたのだ。）今、私が思うのは、単一の人間であることの重荷から逃れることなどないということである。私と私の本には違いがある。けれどもここにいるのはただ一人の人間なのである。これはずっと怖い。ずっと孤独である。ずっと解放される。[1995]

* “Singleness,” one of a group of essays inspired by Borges’s “Borges y yo,” was collected in *Who’s Writing This?*, ed. Daniel Halpern (Ecco Press, 1995).

* エッセイ集“Where the Stress Falls”の日本語訳は二部構成での出版予定。第一部は既刊。富山太佳夫（訳）『書くこと、ロラン・バルトについて—エッセイ集 I / 文学・映画・絵画』（みすず書房、2009）